

論文

2人の作家にとっての時局協力と解放 Two Novels in Collaboration with the Japanese War Regime in the Late Colonial Period

崔貞熙「野菊抄」と韓戊淑『灯を持つ女』について
Cho Jeong-Hui's 'Yagukcho' and Han Moo-Sook's "Woman Holding a Lamp"

山田 佳子¹
YAMADA Yoshiko

1 はじめに

1942年5月、朝鮮における徴兵制実施が閣議決定された。崔貞熙はそれに呼応するように同年11月、「野菊抄」を発表し、韓戊淑は『新時代』誌が1942年11月号と12月号において募集した長篇懸賞小説に『灯を持つ女』を書いて応募し、当選した。

崔貞熙はそれまでも多くの時局協力的な執筆活動を行っていたが、「野菊抄」は時局協力のプロパガンダであるにとどまらず、小説としての完成度も高い。一方、『灯を持つ女』は韓戊淑にとって初めての小説であるが、優れた語彙力と文章力によって物語性が確保された秀作である。いずれも日本語小説である。

これら二つの小説は日本の戦争への積極的な協力姿勢を示した作品であるという点で共通するが、読後感はかなり異なる。短篇と長篇という違いもあるが、戦時色に満ちた「野菊抄」に比べ、『灯を持つ女』は時局を感じさせない娯楽性がある。この違いについて、本稿では両作品の構成、および両作家の置かれていた環境に注目して考察し、さらに、植民地からの解放直後の両作家の活動についても触れたいと思う。

2 崔貞熙と「野菊抄」

2-1 「野菊抄」の展開

記者の肩書も持つ崔貞熙は、日中戦争開始後から新聞や雑誌に時局協力的な文章を数多く書き、また文学者の御用団体である「朝鮮文人協会」の幹事を務めるなど、早くから朝鮮総督府の政策に協力的な態度を示していた。実際に志願兵訓練所取材したこともあり、その経験から生まれたのが「野菊抄」である。崔貞熙は1944年まで時局関連の文章を書いていたことが確認されるが²、解放前最後の本格的な小説とみなされるのは「野菊抄」であり、いわば崔貞熙の時局小説の「集大成」と言ってよい作品である。

「野菊抄」は話者である女性が12年前に子を身ごもったことで自分を捨てた男性に向けて書いた書簡形式の作品である。崔貞熙はそれまでも正式な結婚によらない男女の関係とその破綻、私生児を抱えた女性の生き様を主題とする小説を多く書き、「野菊抄」においても同様のテーマが時局を背景に描かれている。

話者「わたし」はある日、志願兵に憧れる11歳となった息子連れて志願兵訓練所を見学に行く。そして所長から、息子を志願兵に送り出すことに反対する母親の下では立派な軍人が育たず、「母の感化」が何よりも

重要であると論される。3年前、「わたし」は息子から「おかあさん、僕戦争へ征って死んだらおかあさん、泣きまじか?」と問われたとき言葉を返せず、息子を失望させていたのだった。「わたし」はこの日の見学によって、女手一つで息子を立派な日本軍人に育て上げ、戦地に送り出すことが倫理に背いた自らの過去と、相手の男性に対する「復讐」であるとの思いに達し、その一部始終を告げた後、「さようなら」と手紙を結び、男性との完全なる決別を遂げる。

あとで述べるが、このとき崔貞熙には「わたし」の息子と同年齢の息子がいた。そしてこの時期、崔貞熙はたびたび「死」をめぐる同様の母子間のエピソードを随筆や座談会を通じて語っている⁴。「野菊抄」ではそれが自らの追ってきたテーマ、すなわち婚外の異性関係との間で揺れ動く母性と融合し、単なる戦争協力を超えた小説となっている。

2-2 崔貞熙と執筆

崔貞熙が時局関連の記事、随筆、小説の発表や日本語による執筆に手を染めるようになるのは日中戦争開始後の1939年からである⁵。その内容は生活の改善や勤勉、節約といった女性に対する啓蒙的なものから、戦局の拡大とともに朝鮮総督府の提唱する「内鮮一体」、「皇国国民化」などの政策を反映したものとなる。さらに太平洋戦争開戦後は志願兵を賛美する内容のものが目につくようになる。

「野菊抄」の「わたし」が到達したような母親像、すなわち「軍国の母」はこの時期に求められた理想的な母の姿であった。『婦人公論』1942年5月号には真珠湾攻撃のさいに小型潜水艦で特別攻撃をして戦死した9人を称えた記事「嗚呼特別攻撃隊 護国の人柱九勇士の偉勲を讃仰してその英霊に捧ぐ」が掲載され、その一人の実家訪問を伝える「軍神岩佐中佐の母堂を訪う」という記事も見られる⁶。朝鮮においても子供たちに対しては「修身」の授業を通して早くから「死への教育⁷」を行い、「わたし」の息子のような「軍国少年」を育成していた。しかし母親たちの意識を変えるのはそう簡単なことではなく、母親たちの啓蒙が急務であった。『大東亜』1942年5月号は「半島指導層婦人の決戦報告の大獅子吼!!」という特集を組み、その中に金活蘭は、「内地の婦人が出征する息子や夫に『天皇のために一死奉公してください。家のことは何も心配要りません……』と言ったその一言が進撃中の将兵には何物にも代えがたい慰安の言葉なのです⁸」という日本語による文章を寄せ、理想の母親像として示した。

女性の戦争協力のあり方について、日本人女性には「産めよ育てよ国の為⁹」として「産む母」であることが求められる一方、朝鮮人女性には徴兵徴用に反対しない「皇国の母」たることが求められたという¹⁰。それは対米開戦後に人口対策が喫緊の課題となる中で、「大和民族」の増殖と「東亜」への送り込みが「皇国の使命」とされる一方、「外地人口」については人口の増殖よりも兵力としての活用が「焦眉の急務」とされたことによる¹¹。ここには人口の増殖によって「同化していない」朝鮮人が大量に内地に入ってくることへの危惧もあったという¹²。「野菊抄」の背景にはこのような日本の政策が色濃く反映されていることがわかる。

崔貞熙が時局協力活動に積極的に関与した理由には二つのことが考えられる。まず、金東煥との関係である。詩人金東煥は総合雑誌『三千里』を創刊し、崔貞熙はそこで記者として執筆を開始した。その後、随筆、小説へと幅を広げていき、文壇で一定の地位を築いていった。そしてちょうど「野菊抄」と時期を同じくして、一人で育てていた前夫との間の11歳の息子を妹に預けてソウルを離れ、金東煥と同居生活を始める。まもなく長女が誕生する。他の雑誌が次々と廃刊となって消えていくなかで金東煥は『三千里』の継続にこだわったが、そこには朝鮮人経営の雑誌が皆無になることへの危機感とともに、経済的な事情があったと思われる。金東煥にも家族があり、そして崔貞熙も幼い頃に家族を捨てて別所帯をもった父に代わって、長女として家族を養う務めがあった。しかし『三千里』も例外ではなく、親日雑誌へと変貌しながら命脈を保つ。

もう一つは「書く」ことへの執着である。崔貞熙にとって執筆行為は生業であると同時に、自己実現の手段だったように思われる。保育学校を出たのち日本で半年ほど幼稚園に勤め¹³、恩師の縁で得た仕事が三千里社

の事務員兼記者であった。そこから文壇に進出して一定の地位を築くまでの過程を考えると、執筆行為は自らを支える唯一のものだったのではないかと思われる。崔貞熙は日本がそう簡単に戦争に負けるとは想像していなかったと言う¹⁴。したがってどんな条件の下でも「書く」という行為を続けるためには、戦争協力もやむを得ず、またそうした意識もないまま書き続けたというのが筆者の考えである。

3 韓戊淑と『灯を持つ女』

3-1 『灯を持つ女』の展開

韓戊淑は朝鮮時代の官僚階級である両班の血を引く家系に生まれ、釜山の日本人女学校を出たのち、父の古い友人の息子と顔も見ぬまま結婚し、儒教の道徳に厳格な旧家に嫁いだ。そして大家族の嫁としての務めを果たすことに疲れ果てていたとき、偶然見つけた『新時代』の懸賞小説募集に引き込まれ、心に淀んでいたものを吐き出すように¹⁵、一気に書き上げたのが『灯を持つ女』であり、2等に当選した。それまで小説家としての経歴はなく、いわゆる登壇作となるはずであった。

しかしどのような事情か、当選作の発表は著者と題目、簡単な講評にとどまり、作品が掲載されることはなかった。そのため『灯を持つ女』は韓戊淑の年譜や研究書にも韓国語に訳されたタイトルが載っているのみで、それが日本語小説であることをはじめ、小説の内容は知られず、よって研究対象ともなり得なかった。現在は自筆原稿の影印という形で出版されているが¹⁶、最後の数枚が欠落している¹⁷。しかし結末を知ることはできないものの、研究の価値は十分に認められる作品である¹⁸。

『新時代』は懸賞小説の応募規定において小説の内容を以下のように定めている。

平明にして、健全明朗なるもの。取材は現代物でも、歴史物でもよい。いづれにしても、戦時下国民の生活力に機械油の如き愉悦を注いでくれる小説であつてほしい¹⁹。

(中略) 国文によつて一般大衆の文学的な要求に答へ、よくその嗜好を高め、以て民衆を啓蒙指導することの出来るやうな作品は、ほとんど絶無と言つても過言ではないやうです……一般大衆の国文による文学的な要求に応ずることこそ、半島文化の現段階に於てはもつとも必要な事業の一つではないだらうかと思はれるのであります(後略)²⁰

すなわち戦時下の生活において潤滑油となるような健全明朗な内容であり、大衆の文学的嗜好を満足させるとともに、啓蒙的な役割を果たす日本語による小説というわけである。

物語は没落両班家の娘、英姫の嫁入りから始まり、出産、姑と兄嫁による冷遇、離縁、自殺未遂を経て、職業婦人としての再生に至るまでの20年ほどの時間の流れの中に、英姫の娘をはじめとする若い世代の新しい生き方が提示される。すなわち伝統的な家父長制の家から追い出され、自殺を図って助けられた英姫が一時的に身を隠したのち、数年後に梨枝を名乗って美容師、カフェの経営者という自立した女性となって再登場し、若い世代との関わりの中で新たな物語を展開するという筋立てである。

自殺を図った英姫が一時的に姿を消している間をつなぐのが若い世代の生活模様であり、ここに『新時代』の求める条件のほとんどが備えられている。具体的には家父長制の否定、迷信の排除、衛生指導、内鮮一体、創氏改名、銃後活動などである。まさに1942年の時局において「健全明朗」で「民衆を啓蒙指導」するに値し、しかも梨枝となった英姫の行く末は想像力を刺激し、「文学的な要求」を満足させる。以下、それらの表れている部分に注目しつつ、作品の展開を追っていく。

まず、導入部にあたるN村の婚家での英姫(えいき²¹)の待遇である。大方の物語がそうであるように、英姫の嫁暮らしが順調であるはずはない。姑との確執や陰謀、さらに夫の浮気によって英姫は追い出されるようにし

て家を去る。韓戊淑自身も旧家に嫁ぎ、家族の世話をはじめ、旧時代のしきたりを厳格に守らなくてはならない生活を「虐待」のように感じることもあったというが²²、作品に書かれているのは古典的物語に見られるような極端な継子いじめであり、「呪い人形」という仕掛けによって英姫を追い出す下りは、むしろ姑や兄嫁の人物像を滑稽に見せている。すなわち導入部は伝統的な家父長制や占い等の迷信を揶揄する目的を持って創作されたものと思われる。同様のことは葬式のさいの習俗である「哭」の否定といった形にも表れている。

婚家から出た英姫は一人娘の慶恵(よしえ)を連れてソウルで下宿暮らしを始める。このとき夫は妓生の娘である婉曲(えんぎよく)と新生活を始め、慶恵の妹となる慶子(よしこ)をもうける。出世した父を持つ慶子と、父のいない慶恵の将来を比較して悲観した英姫は慶恵を夫のもとへ送ることを決心し、自らは自殺を図るが、医師である外国人宣教師に助けられる。ここで英姫はいったん姿を消す。英姫はその間、宣教師と墮落した同居生活を送っていたことが小説の終盤でほのめかされるがやや唐突感がある。あるいは「鬼畜米英」やキリスト教排除の意味を含ませているのかもしれない。

ところで英姫は慶恵との別れに際し、動物園に連れて行ったり、デパートで「花飾りのついた夏帽子」と「リボンのついたボイルの子供服」、それに「ママーと泣く大きな人形」、「贅沢な飯事遊び一式」を買い与える。こうした具体的な文物の描写は、執筆当時の韓戊淑の生活感を示すものとして注目される。

一方、再び本家の孫娘となった慶恵をはじめ、若者たちの世界は明るく健全である。慶恵の従兄にあたる慶宰(けいさい)は医師であり、日本留学中に日本人の美沙子と結婚し、北京の病院勤務を経て、N村に医院を開く。診療は美佐子と慶恵も手伝って村人の衛生教育や民間療法を排除、伝染病予防に努め、貧しい人々は無料で診察する。美沙子はこの小説で唯一の日本人であるが、巧みな朝鮮語を話し、慶恵の仕立てた朝鮮服を着ている。そして慶宰の祖母、すなわち英姫の姑を献身的に看病し、信頼を得る。

N村では慶宰の中学の同窓、承観(しょうかん)が農場を開き、評判になっている。承観は大学時代に「危険思想²³」に陥って上海に渡ったが、その後転向し、故郷に前科者や浮浪人を集めて農場経営を始めた。そして志満(しま)という姓をつくり、農場のみなを家族として入籍させる。この農場は「国旗掲揚」、「宮城遙拝」、「君が代斉唱」を行い、「皇民化政策」の象徴となっている。

慶恵の妹、慶子はソウルの女学校に通い、二人の姉妹は対照的な性格に設定されている。慶子はこの時代のいわゆる「新女性」であり、友人の光子(みつこ)の家に遊びに行っては光子の兄、光浩(みつひろ)に親しげに振る舞い、映画に連れて行くようせがんだりする。また、女学校を卒業するやいなやパーマをかけに美容室を訪れる。それが梨枝(りえ)の経営する「瑠美美粧院」というわけであるが、互いに相手のことを知る由もない。

梨枝となって再登場した英姫が娘の慶恵と接点を持つのは、光浩が「朝鮮美術展覧会²⁴」に出品して特選となった絵画「灯を持つ女」を見てからである。その絵はやはりN村出身の光浩が大みそかの晩に慶宰を訪ねたとき、慶恵が朝鮮古来の習俗²⁵にしたがって家中に火を灯して回る光景を目にし、それを絵画化したものである。その絵を梨枝が目にしたことをきっかけに梨枝と慶恵の距離が近づき、読者に二人の再会の場面を心待ちにさせるが、その機会が訪れるまでにさらに若い世代の物語が続く。

光浩に恋心を寄せる慶子に対し、光浩は慶恵を慕い、また慶恵は承観の人間性にひかれる。そして承観もまた密かに慶恵を思う。この4人の関係をめぐってそれぞれの性格が露わになり、韓戊淑の技量の高さをうかがわせる。結局、慶恵と承観、慶子と光浩が結ばれることとなり、慶恵と承観の結婚式が明治節に「神宮」で執り行われることが決まる。それを知った梨枝はまだ見ぬ成長した我が子の花嫁姿に思いを寄せ、化粧係を願い出る。しかし最後まで慶恵が梨枝を母と気づくことはなく、娘を娘と呼べない梨枝は悲嘆に暮れる。

その後、梨枝は承観の農場に名前を告げずに寄附し、初めて農場を訪れる。物語は慶恵が梨枝を「私の結婚式のお仕度をして下さった方です」と紹介する場面で途切れる。影印本はここから数頁が欠落しているのである。

3-2 韓戊淑の見た世界

影印本『灯を持つ女』を開くと先ず、原稿用紙に流れるように書かれた文字の美しさに目を引かれる。そして読み進めるにつれ、日本語の巧みな文章力と語彙の豊富さに驚かされる。さらに同時代の文化や社会に関する知識や観察力など、この一作から韓戊淑の教養と小説家としての資質がうかがわれる。

ソウルで生まれ、翌年に父の転勤に伴って釜山に移り住んだ韓戊淑は、父の強い希望により日本人学校である釜山公立高等女学校へ進んだ。父が日本人学校にこだわったのは、朝鮮人の学校より修業年数が2年長いところに韓国教育に力を入れようとならない日本の政策が露骨に表れていたこと、そしていずれ上の学校で日本の学生と競うことになるのなら初めから同じ土台で学ばせようという思いのためであった²⁶。じっさい同級生34名の中で唯一の朝鮮人であり、差別こそされないものの、級友から「鮮人」や「朝鮮人」ではなく、「朝鮮の人」と呼ばれ、それが却って劣等感や被害意識を抱かせたという²⁷。よそよそしさを感じたのであろう。日本人女学生にとって朝鮮人女学生は別世界の人間であり、「敬して遠ざける」存在だったようである²⁸。それでも日本語に不自由することはなかったという²⁹。道庁に勤める植民地下の役人であり、知識人だった父は自宅にたくさん蔵書を所有し³⁰、おそらくそこには日本の書籍もあったであろうし、また日本人との交際も多かったと推測される。『灯を持つ女』からは日本語の文章力のみならず、そのような韓戊淑の育った環境によるものを読み取ることができる。

創作に最も大きな影響を与えたと考えられるのが日本人女学校における生活や教育内容である。沢井理恵『母の「京城」・私のソウル³¹』と広瀬玲子『帝国に生きた少女たち³²』は、どちらも植民地下の京城第一公立高等女学校の卒業生に取材したものであるが、それを見ると、生徒の親はホワイトカラーの職業がほとんどで、なかでも総督府の役人が多かったという³³。そしてその中に遠い存在として両班の娘が一人か二人混ざっていたとする³⁴。また、朝鮮人が多く住む鍾路へは行かず、そこにある和信百貨店で買い物をすることもなかったという³⁵。すなわち日本人女学校の生徒たちの生活は朝鮮人の世界とは隔絶した植民地支配側にあつたことがわかる。

ソウルと釜山という違いはあっても、韓戊淑の成長した世界も同様であったと思われる。そのような『灯を持つ女』が執筆される前提を考慮するならば、『新時代』の求める条件に従って書くことにさほどの困難はなかったのかもしれない。すなわち『灯を持つ女』のどこか豊かで余裕が感じられ、娯楽性のあるストーリーはまさに「健全明朗」で「戦時下国民の生活に機械油の如き愉悦をそそいでくれ」、「国文によって一般大衆の文学的な要求」に答えるとともに、「民衆を啓蒙指導することの出来る」作品として評価されたのである。

具体的に見ていくと、日本人女学校では「家事」の時間には各種の料理や洗濯の実習のほか、「応急手当」などの衛生看護の知識を学び、「裁縫」の時間は「国語」に次いで多く、生徒たちは「賢母良妻の候補者」との期待がかけられたが、実際は「女子大への予備軍」の方が多く、内地に比べて自由で開放的だったという³⁶。病院の仕事を自ら工夫を凝らしながら積極的に手伝う働き者で献身的な慶恵や美沙子、奔放な性格の慶子のような若い女性の人物設定にはまさに日本人女学校における韓戊淑の体験が映し出されている。また、映画は「娯楽の王様」だったものの、父兄同伴でないと行っていけなかったこと、女学校を出てすぐパーマをかけたこと³⁷などの細かい事柄も、慶子の行動にそのまま表れている。さらに、「図画」では梨枝が慶恵と再会するきっかけとなる鮮展の見学が毎年行われていた³⁸。

一方、日本人女学校の生徒たちは朝鮮の習俗は「まったくと言っていいほど何も知らず³⁹」、葬式のさいに「アイゴアイゴ」と泣き続ける「哭」について、「皆が馬鹿にしていた⁴⁰」という証言は、美沙子が「私の代からは改めるようにしてみせる⁴¹」と内心で誓う下りを裏付ける。作品中には国民学校の「修身」の時間に教師が迷信を否定する教育をしていたことがわかる場面もある⁴²。絵画「灯を持つ女」を生んだ大みそかの習俗は作品の展開において最も重要な役割を果たすものであるが、そうした古来の祭事風俗は総督府も否定してはいなかったのかもしれない。ここには韓戊淑の朝鮮人としての誇りも垣間見える⁴³。

そのほか、英姫が慶恵との別れに際してデパートで買い与える洋装や玩具についての細かな記述からは韓戊淑個人の生活水準がうかがえる。「ママーと泣く大きな人形」というのは、同時代に存在した高価な日本人形であるらしい⁴⁴。

以上のことから『灯を持つ女』の創作には、役人の父を持ち、日本人女学校に通っていた韓戊淑個人の体験が大きく関わっていたことがわかる。旧家の嫁としての英姫ではなく、職業を持って自立した梨枝こそが、この時代の朝鮮人女性に求められたもう一つの女性像、すなわち「皇国の母」とは別に、「生産労働力として⁴⁵」動員できる女性の姿を示している。なにより梨枝という新しい女性に生まれ変わったことで英姫は慶恵と再会できたのである。

『灯を持つ女』においては、上で言及しなかったもののうち承観の農場の果たす役割も大きい。『新時代』の講評では承観を主人公と見るほど、「皇民化政策」を体現するこの農場をめぐるストーリーを重要視している⁴⁶。日本人女学校でも朝鮮神宮の参拝や、朝鮮人を対象に作られた「皇国臣民ノ誓詞」の唱和が行われていたが⁴⁷、「修身」の内容はあまり記憶に残っていないようである⁴⁸。とすれば、ここは『新時代』が「あまりに大寫しにされ過ぎたために、作品の焦点がぐらついた⁴⁹」と評するように、韓戊淑が自己の体験とは別に、「皇民化政策」を反映する目的で創作して挿入したストーリーではないかと思われる。

4 解放直後の執筆について

植民地時代末期、時局協力作品や日本語による執筆が必須となり、自ら筆を折る作家も多いなかで崔貞熙は記者、小説家として積極的に執筆を続け、「野菊抄」においては朝鮮人女性に求められた「軍国の母」のあり方を提示した。また、韓戊淑は『新時代』の求めに応じる形で初めての小説執筆を行い、自らの体験をもとに労働力としての職業婦人を描いた。事情がどうあれ時局協力を行ったという事実は変わらず、植民地からの解放によって立場が危ぶまれることは予想できたであろう。ここでは二人の作家の解放直後の執筆について触れる。

崔貞熙は1949年に作品集『風流ただよう村』を出版した。ここに含まれる作品のほとんどは1946年から1950年にかけて書かれたものであるが、なかでも表題作の「風流ただよう村」は崔貞熙の作品としては異質の農民文学であり、しかも女性主人公の曖昧な行動が何を意味するのか解釈が難しい。これについて筆者は、米軍政下に置かれて左右勢力が対立し、未だ取り戻されるべき国の姿が見えない状況において、親日派処罰を恐れる崔貞熙が自らの立場を保留し、中立を装う意図があったものと解釈した⁵⁰。結局のところ、民主主義国家の設立を急ぐ米国は親日派問題を上げることのないまま、1948年の分断国家成立を挟んで朝鮮戦争の勃発に至る。

朝鮮戦争が始まると、崔貞熙は1951年3月に結成された空軍従軍文人団に加入して活動する⁵¹。これには戦争勃発直後の北朝鮮人民軍によるソウル占領時に、避難できずにソウルに留まったことが逆行行為とみなされて処罰されることを恐れていたという事情がある⁵²。植民地下の朝鮮人が「皇国臣民」とならざるを得なかったように、建国後の韓国の国民は朝鮮戦争期に「防共国民」でなければならなかったのである⁵³。

このように崔貞熙は時代に翻弄されながら、それに抗うのではなく執筆によって困難を乗り越える職業作家であった。そして「野菊抄」において母性を「軍国の母」に置き換えた手法は、従軍作家として書いた「出勤前夜⁵⁴」にも見られ、息子の出征をなんとか食い止めようとする母が好戦的な息子に諭され、積極的に息子を送り出すまでを描いている。枠組みは変わっても母性というテーマだけは一貫して持ち続けたのである⁵⁵。

韓戊淑は『灯を持つ女』を韓国語で「등잔불 드는 여인」として1947年から1948年にかけて『새살림』誌に連載した。「新しい暮らし」を意味するこの雑誌は1946年9月に米軍政の下に創設された婦女局の機関誌で、男女平等と女性の政治参与の促進を目的としていた⁵⁶。しかし途中で一時休刊となり、連載はわずか5回で唐突に終了している⁵⁷。『灯を持つ女』は時局協力の要素を除けば、まさに若者世代による「新しい暮らし」を提案するような内容である。じっさい韓戊淑は舞台を植民地からの解放後に置き換えており、『새살림』の性格にふ

さわしい作品であったと言えるかもしれない。しかし当時の韓戊淑は無名の素人作家に過ぎず、なぜいきなり雑誌への連載が可能となったのかには疑問が残る。また、『灯を持つ女』は公表されていなかったため、親日派処罰を恐れて米軍政の庇護を求める必要もなかったはずである。推測の域を出ないが、考えられることは、この連載には韓戊淑自身の人知れぬ後ろめたさと、米軍政との何らかの縁故が関与していたのではないかとということである。真実は不明である。

韓戊淑はこのあと 1948 年に長篇『역사는 흐른다』(歴史は流れる)が『国際新報』の懸賞小説に当選し、事実上の登壇を果たす。

5 おわりに

本稿はいずれも 1942 年に書かれた時局協力小説である崔貞熙の「野菊抄」と韓戊淑の『灯を持つ女』を取り上げ、その違いについてそれぞれの作家の置かれた環境から考察した。「野菊抄」は当時、すでに小説家として多数の作品を発表していた崔貞熙が、自己のテーマとしてきた母性を朝鮮人女性に求められた「軍国の母」と結び付けることにより、戦時を反映しながらも、単なる戦争協力を超えた完成度の高い小説となった。そして「軍国の母」は朝鮮戦争期には形を変えて再生産された。一方、『灯を持つ女』は韓戊淑の初めての小説であり、日本人女学校に通った経歴をもつ韓戊淑が、その体験をもとに自立した女性、すなわち「労働力」としての朝鮮人女性を描いていることが明らかになった。

また、植民地からの解放直後の二人の執筆からは、そうした作品を書いたことによる何らかの危機意識があったことがうかがえた。

朝鮮の作家たちが日本の戦争時にどのような環境に置かれていたのかは、個人的な事情を含めてそれぞれに異なる。本稿で扱ったものはそのほんの一例に過ぎない。今後、より多くの例を取り上げ、時代に翻弄された作家たちがどのように植民地体験を乗り越えて自らの執筆を継続していったのかについてさらに検証できればと思う。

注

¹ 新潟県立大学国際地域学部

² 『実践文学』73 号(2004 春)の「企画:日本の植民主義と東アジア文学」の中に、「発掘:崔貞熙の親日文学作品」として散文 3 作品、小説 1 作品が掲載されている。

³ 崔貞熙「野菊抄」、『国民文学』1942.11、p.143。

⁴ 「帰還勇士と文人座談会」、(『緑旗』1942.1)、「時局の母親—軍国の子供に感激」(『京城日報』1941.2.18)、「君国の母」(『大東亜』1942.5)など。

⁵ 山田佳子「崔貞熙の植民地末期における時局関連作品—三つの類型と『野菊抄』」(『国際地域研究論集』第 7 号、2016.3)参照。

⁶ 酒井順子『百年の女—婦人公論』が見た大正、昭和、平成、中央公論新社、2018、p.132。

⁷ 藤田昌三、「朝鮮総督府編纂・初等学校用修身教科書の検討—天皇像と軍事教材を中心に—」、『民主教育研究所年報』10、2009、p.302。

⁸ 金活蘭「女性の武装」、『大東亜』1942.5、pp.96-97。

⁹ 1939 年に厚生省が人口減少に歯止めをかけるために発表した「結婚十訓」の中の一つ。「東亜の聖業」のために戦うには「優良なる人的資源の供給」が必要とされ、ここには「優生思想」も見られる(酒井順子、上掲書、p.124)。

¹⁰ 河かおる「総力戦下の朝鮮女性」、『歴史評論』No.612、2001.4、p.11。

¹¹ 同上、p.9。

¹² 同上、p.10。

2人の作家にとっての時局協力と解放
崔貞熙「野菊抄」と韓戊淑『灯を持つ女』について

- ¹³ 東京滞在中に劇作家の金幽影との間に息子を授かった(徐永恩『崔貞熙伝記 河の流れの果て』、ソウル、文学思想社、1984、pp.30-31)。ただし、東京での軌跡については不明な点も多い(山田佳子「習作期の崔貞熙」、『朝鮮学報』2005.1参照)。
- ¹⁴ 2010.4.19 付『中央日報』の記事「崔貞熙と二人の娘 I」によれば、1970年代のある日、文人たちの集まりの場で過去の親日活动について問われた崔貞熙は、「日本があんなにすぐ負けるとは思わなかった」と恥ずかしそうな微笑みを浮かべて語ったという。
- ¹⁵ 韓戊淑『この寂しい出会いの祝福』、韓国文学社、1981、p.104。
- ¹⁶ 『灯を持つ女』、權歌書房、2000。
- ¹⁷ 原稿を発見した夫の金振興氏によれば、重なって保管されていた原稿の下の 2,3 枚が湿気のため判読不可能の状態だったという(『灯を持つ女』、上掲書末尾)。
- ¹⁸ 本稿の一部は山田佳子「韓戊淑文学の出発点—日本語小説『灯を持つ女』を通して—」(『国際地域研究論集』第 11 号、2020.3)において発表したものである。
- ¹⁹ 「長篇小説懸賞募集」、『新時代』1942.12。
- ²⁰ 同上。
- ²¹ 登場人物の名前には日本語読みのルビが振られている。以下も括弧内に示す。
- ²² 韓戊淑「火種」、『私の心に浮かんだ月』、乙酉文化社、1992、p.26。
- ²³ 韓戊淑『灯を持つ女』、p.101。
- ²⁴ 1922年に朝鮮総督府による「文化政治」の下に創設され、「芸術上の日鮮融和を図る」という目的により朝鮮人からの出品を促した(金惠信『韓国近代美術研究』、ブリュッケ、2005、pp.67-68)。
- ²⁵ ソウルの祭事風俗として、大みそかの晩に部屋、庭、台所、戸、便所など、家中の所々に火を灯して夜を明かす「守歳」がある。雑鬼の出入を防ぐためとされる(任東權『韓国祭事風俗研究』、集文堂、1993、p.214)。
- ²⁶ 韓戊淑「火種」、上掲書、p.21。
- ²⁷ 韓戊淑『この寂しい出会いの祝福』、上掲書、p.81。
- ²⁸ 広瀬玲子『帝国に生きた少女たち—京城第一公立高等女学校生の植民地経験』、大月書店、2019、p.104。
- ²⁹ 韓戊淑、『この寂しい出会いの祝福』、上掲書、p.81。
- ³⁰ 同上、p.91。
- ³¹ 沢井理恵『母の「京城」・私のソウル』、草風館、1996。
- ³² 注 28 参照。
- ³³ 沢井理恵、上掲書、p.67。
- ³⁴ 同上、p.81。
- ³⁵ 同上、p.63。
- ³⁶ 広瀬玲子、上掲書、p.68、46、78。
- ³⁷ 沢井理恵、上掲書、p.87、88、111。
- ³⁸ 広瀬玲子、上掲書、p.68。
- ³⁹ 沢井理恵、上掲書、p.73。
- ⁴⁰ 広瀬玲子、上掲書、p.113。
- ⁴¹ 韓戊淑、『灯を持つ女』、上掲書、p.119。
- ⁴² 同上、p.35。
- ⁴³ 大石和世は「祭事の行事への関心は、朝鮮人知識人にとっては民族的な主張に基づくものだった。一方、朝鮮総督府にとっては、朝鮮半島の生活を知的に把握することによって、朝鮮の領域と資源、住民を統治することが目的だった」と述べている(『韓国民俗学における『祭事風俗』の概念について—越境的民俗学史のために—』、『総研大文化科学研究』2008.3、p.40)。ただし、個々の風俗についての総督府の対応については別途、調査する必要がある。
- ⁴⁴ 2020.9.2 付『朝日新聞』13 版 S「オピニオン」の「声」欄に、1944 年頃のこととして「抱き上げると『オギヤー』と声を出しながら目を開き、横にすると目をつむる人形」があったという内容の投稿が見られる。これと類似のものであろう。
- ⁴⁵ 河かおる、上掲論文、pp.12-13。
- ⁴⁶ 「懸賞長篇小説選後評」、『新時代』1943.12。
- ⁴⁷ 沢井理恵、上掲書、p.93。広瀬玲子、上掲書、pp.84-85。
- ⁴⁸ 広瀬玲子、上掲書、p.66。
- ⁴⁹ 「懸賞長篇小説選後評」、上掲記事。

- ⁵⁰ 山田佳子「崔貞熙の作品集『風流잡하는 마을』について」、『朝鮮学報』第189輯、2003.10。
- ⁵¹ 山田佳子「崔貞熙の小説に描かれた太平洋戦争と朝鮮戦争—戦争と母子」、『国際地域研究論集』第10号、2019.3) 参照。
- ⁵² 小野順子「朝鮮戦争期小説研究—韓国従軍作家を中心に—」、博士(文学)学位論文、九州産業大学大学院国際文化研究科、2007.3、p.20。
- ⁵³ ソ・ドンス『韓国戦争期の文学談論と防共プロジェクト』、ソミョン出版、2012、p.354。
- ⁵⁴ 崔貞熙「出勤前夜」、『戦時 韓国文学選 小説篇』、国防政訓部、1954。
- ⁵⁵ 崔貞熙の息子は実際に召集され、崔貞熙がたびたび面会に行っていたとされる(小野順子、「崔貞熙の作品にあらわれた二つの戦時体験—太平洋戦争と朝鮮戦争を中心に—」、『福岡大学人文論叢』第42巻第3号、2012.12、pp.751-752)。
- ⁵⁶ 『새살림』の性格、および「등잔불 드는 여인」の掲載状況については、イム・미진「解放期の民主主義宣伝と女性解放—家庭雑誌『새살림』を中心に—」(『韓国学研究』第47輯、2017.11) 参照。
- ⁵⁷ 『새살림』は1年後に再刊されたが、韓戊淑の作品は掲載されていない。